

● 迫害されるユダヤ人に 手をさしのべた人道的日本人



ポーランド点描新聞
日本文化再発見特集
『人空羽衣遠』⑧

杉原千畝

すぎはらちうね 岐阜県美濃市出身
1900(明治33)年～1986(昭和61)年



1939年7月、杉原千畝は新設されたリトアニアの在カウナス日本領事館に領事代理として着任します。同年9月1日、ナチス・ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発しました。すでに西ヨーロッパではナチスによるユダヤ人への迫害が激化し、国外に脱出を図るユダヤ難民がリトアニアに一時避難していました。ヨーロッパは西も南もナチスの進撃によってユダヤ難民たちの逃げ道はなくなり、もはやシベリア経由で東へ逃げる道しか残されていなかったのです。

1940年7月18日、大勢のユダヤ人避難民が通過ビザを求めて日本領事館前に殺到しました。ソ連の命令によって日本領事館が間もなく閉鎖されることを知ったからです。

しかし、日本政府は「避難先の国の入国許可及び避難先の国までの旅費を持っていること」などを日本通過ビザの発給条件としていました。ビザ発給を求めて領事館にやって来たユダヤ人の多くは、この規則に従えばビザの発給が認められない人々でした。

杉原は緊急に本省(日本の外務省)と電報で何度も連絡をとりますが、本省からの回答は規則通りに発給せよというのみです。彼は苦慮し考えぬいた末に、ついに人道と博愛精神第一という結論に到ります。そして、

命の危機が迫るユダヤ人に対して、「クビになっても構わない、人道上拒否できない」と、条件を付けずにすべてのユダヤ人に対しビザを発給する決心をしたのです。

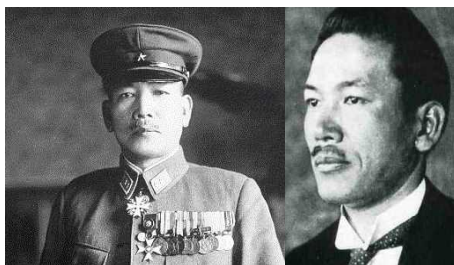
7月29日、杉原千畝はユダヤ難民に対してビザ発給を開始します。それからおよそ1か月の間、千畝は寸暇を惜しんでビザを書き続けました。ソ連の命令によって領事館を退去した後もホテルで書きました。いよいよ出国という最後の日、駅にまで押しかけてきたユダヤ人たちにも書き続け、最後のビザは車窓から手渡したのです。

日本通過ビザを受け取った避難民はシベリア鉄道でウラジオストックに到着、船で敦賀に上陸後神戸や横浜を経て世界各国に避難していきました。杉原の書いた「命のビザ」によって命を救われたユダヤ人は6千人以上とされています。後年、イスラエル政府から「諸国民の中の正義の人」として表彰されました。

(参考「杉原千畝記念館」)

樋口季一郎

ひぐちきいちろう 兵庫県淡路島出身
1888(明治21)年～1970(昭和45)年



杉原千畝によって「命のビザ」が発給されるおよそ2年前の1938年3月、ソ連と満州国の国境沿いにあるシベリア鉄道のオトポール駅(ザバイカリスク駅)にヨーロッパを脱出してきたユダヤ人難民が到着し始めました。彼等は着の身着のまま栄養状態も悪く、極寒の地で凍

死寸前の悲惨な有様でした。

当時、ハルピン陸軍特務機関長であった樋口季一郎(当時陸軍少将)はこの惨状を見かね、部下に命じてユダヤ人避難民に食料や衣服・医薬品の配給を行うとともに、ナチスドイツに遠慮して通過証を出し渋る満州国外交部と交渉し、満州国内への入植や上海租界(日本の行政権が及ぶ地域)への移動を斡旋しました。

彼は、少佐時代の1925年に公使館武官としてポーランドに赴任したことがあり、ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の実態をよく知っていました。この事件の前年、満州国ハルピンで開かれた第1回極東ユダヤ人大会に関東軍代表として出席した時には、ナチスドイツのユダヤ人迫害を間接的に批判する演説を行っています。日本がドイツと同盟関係にあったことを考えると、異例の発言でした。

今回もドイツは日本政府に抗議しましたが、樋口は「法治国家として、当然とすべきことをしたにすぎない」と述べ、関東軍参謀長であった東条英機も「当然なる人道上の配慮によって行った」と、ドイツの抗議を退け、樋口を擁護しました。

オトポール経由で上海へ脱出する経路は「ヒグチルート」と呼ばれ、多くの避難民が利用しました。記録がないため正確にはわかりませんが、以後約3年の間に満州や上海へ脱出できたユダヤ人難民の数は数千人に及ぶと考えられます。後年、樋口はイスラエル政府によって、ユダヤ民族に貢献した人々の名を刻む「ゴールデンブック」に名を記載されました。(参考「オトポール事件」)

